

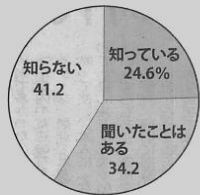
# がん患者の妊娠 諦めないで



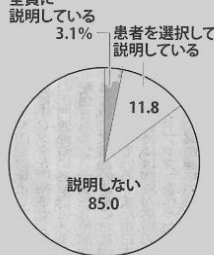
岡山大病院内の生殖機能温存センターで体外受精をしながら受精卵の培養や顕微鏡をみる。岡山大病院内でがん患者の出産可能性について説明するパンフレット。岡山大病院やセンターの医師が無料で配布している

## 医療従事者の認識も不足

Q1・がん患者の生殖機能温存をできているか



Q2・がん患者に生殖機能温存について説明しているか



## 卵子など凍結保存 妊孕性を維持

がん患者の妊娠について教えてほしい。がん治療の進歩でがんを克服する人が増えています。それに伴い、治療後の生活の質（QOL）も求められるようになり、快適な日常生活を送ったり、カップルなどをも産み育てることがさらにQOLに関わります。

——生殖機能、妊孕性の温存とはどんなことをするのですか。

◆卵子の保存は、排卵誘発剤を使い、卵巣を穿刺させ、麻酔をして卵巣に針を挿入します。パートナーがいない女性も未受精卵をそのまま凍結保存、パートナーがいれば体外受精をして保存することもできます。

## 治療後も快適な生活を

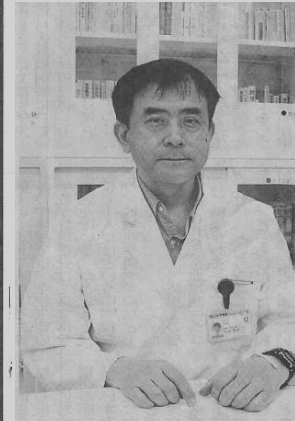
所要期間も約20日、費用は30万円〜50万円です。卵巣の凍結保存は、腹腔鏡下手術などで組織の一部を採取する。手術の目的は、費用は約70万円、精子は男性に射精して凍結保存しますが、近頃でも費用が補助する自治体が増えています。

岡山全ての取り組みを教えてください。

◆岡大病院でがん患者の卵巣凍結保存したのは2006年、国内初でした。15年には体外受精などでの卵子や精子の産婦人科医と泌尿器科医、また、受精卵を取り扱う胚培養士、受精卵を凍結する冷凍士の養成・特化した生殖補助医療技術センターを国内で総合大学で初めて設置しました。センターでは産科と産科、産科士も専門医はいます。

◆岡山大病院でがん患者の卵巣凍結保存をしたのは2006年、国内初でした。15年には体外受精などでの卵子や精子の産婦人科医と泌尿器科医、また、受精卵を取り扱う胚培養士、受精卵を凍結する冷凍士の養成・特化した生殖補助医療技術センターを国内で総合大学で初めて設置しました。センターでは産科と産科、産科士も専門医はいます。

## 岡山大病院 中塚幹也教授に聞く



中塚幹也教授—岡山市北区鹿田町の岡山大

## 選択肢として啓発必要

がん患者の生殖医療の課題はどんなことでしょうか。

◆まず、生殖機能、妊孕性温存治療という選択肢があるというところを知ってほしい。患者だけでなく、医療側にもまだ十分に知られていません。がん患者の生殖医療を考えるネットワークが10年に県内の医療機関18施設、計1056人のがん治療に関わる医療スタッフを対象にアンケートした結果、9人が回答があります。がん患者の生殖機能温存について知っている、と答えた人は全体の25%で、医師は8割でしたが、看護師は割と少なかった。



妊娠や出産などに関する基本的な説明資料も作製・無料配布されている

生殖機能温存について患者に説明しているか聞いたところ、85%が説明していません。その理由を聞いてみると、医師として、不好の相談に来た患者で「妊娠について何も説明してあげない」という医師が、まだ十分にできていないのが始まった、と医師も不信感を抱いている人もいます。

啓発活動が必要ですね。

◆13年鹿田の事件の二週間で一部の医療機関を回り生殖機能温存治療について講義したり、患者向けの冊子を制作するようになりました。かん、きい、まが、まに丁寧に患者に説明していただく必要があり、ネットは本内外の連携で、内部の生殖医療連携を強めるため、「リフレロタクソン（生殖センター）」を昨年10月に岡大病院に開設しました。がん専門医や看護師、心理士などの人材やスキルをかし、患者への精神的サポートを強化した先進医療を目指しています。

患者さんにとっては、がん治療の拒否に妊娠のことを聞かせる人もいます。けれども、岡山県不妊専門相談センター（086・2335・6044）が岡大病院内にあるので、気軽に相談していただければと思います。